



Title	GLOCOLブックレット08 はじめに
Author(s)	三田, 貴
Citation	GLOCOLブックレット. 2012, 8, p. 3-6
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/48341">https://hdl.handle.net/11094/48341</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# はじめに

**三田 貴** 大阪大学グローバルコラボレーションセンター特任助教

「日本人」として日本に生まれて、日本の学校に通っていると、学校が現代のグローバルな変化に対応できていないことには気づきにくいです。日本語ができる前提で進められる授業や、学校における人間関係、授業内のルール、試験のあり方、集団生活の論理などの、学校における「常識」あるいは「学校文化」といったものは、決して世界中で普遍的なものではなく、日本という社会の歴史的・文化的な文脈のなかで作られてきた、特有のものです。国や文化が違えば、言葉も違い、学校文化や常識も異なります。グローバルリゼーションが進行するなかで、国境を越えた人々の移動や移住はもはや特殊なものではなく、どこでも当たり前のこととなりました。日本人が海外を訪問したり移住したりすることも珍しいことではありません。同様に、海外から日本にも人は移動します。そして、人々は「国境」や「国籍」といった人工的な社会制度とは無関係に、新たな家族を作り出し、また移動を繰り返します。一つの民族が一つの国家を持つという近代国民国家の前提は、こうした現実を前にして、すでに妄想となったと言えるでしょう。日本の学校や地域社会、そして関係する諸制度は、こうしたグローバルな人の動きを伴う社会の変化に対応できているとは言い難いです。

外国にルーツを持つ子どもたちは、言葉や文化の違いでさまざまな困難に直面しています。級友や教師とのコミュニケーションや学校の成績、進路、アイデンティティへの葛藤など、複雑で多様な課題を抱えながら暮らしています。こうした課題に対して、学校の現場や支援団体などで実践活動に関与する人々は、これまでも多様な取り組みを行って改善や解決を目指してきました。しかしながら、多くの場合は担当する教員やボランティアの個人的熱意や資質に依存する形での「対応」に留まります。一個人や一学校の枠を越えた地域全体もしくは日本全体を巻き込んだ形で、真の共生社会を作り上げる段階までには、今の日本は至っていません。

共生社会の実現のための実践的関わりを重視してきた大阪大学グローバルコラボレーションセンターは、2011年1月に、「グローバル共生」に関する問題を研究している大学院生が中心となって、「トランスナショナルな子どもたちの教育を考える」ワークショップを開催しました。「トランスナショナルな子どもたち」とは、このワークショップを企画した大学院生たちが意図をもって選択した言葉で、「国境を越えたり移動を経験したり、国際結婚をした両親を持つ、物理的にも心理的にも一つの国に収斂されない子どもたち」のことを指しています。

このワークショップを主催したグローバルコラボレーションセンターは、大阪大学の全研究科の大学院生を対象とした高度副プログラム「グローバル共生」を提供しています。「グローバル共生」プログラムは、専門家や実践者、市民、研究者らが協働し、グローバル化時代に必要な「共生社会」のデザインを描き実践していくための理論と方法について学ぶことを目標としています。そのためプログラムを履修する学生自身が実践的な現場に身を置き、新たな対話と交流の機会を生み出すことが強く奨励されてきました。「グローバル共生」を履修する大学院生の多くは、共生社会の実現を目指した支援活動や国際協力に自ら関与した経験を持っています。こうした学生の一人ひとり、それぞれの現場で意義深い活動をしているだけでなく、同時に、それぞれの活動現場が抱える課題や悩みも客観視し、それらの改善を検討してきました。こうした学生のなかから、より実践的な取り組みを自らの手で実施したいとの要望が出され、大阪大学グローバルコラボレーションセンターは、学生の発案した企画の実現に向けて支援しました。企画は地域研究コンソーシアム(JCAS)次世代ワークショップの助成を受け実現することとなりました。

ワークショップ企画者の呼びかけにより、合計46名がワークショップに参加しました。企画の意図通り、教育関係者(小学校・中学校・高校の教師、保育士、日本語教師)、行政関係者、大学関係者、実践者、高校生、大学生、大学院生と、幅広い分野の人々に議論に参加していただくことができました。このうち「当事者」は12名で、彼・彼女らの存在により、ワークショップがより意義深いものになったことは特筆しておきたいことです。

本書は、多文化共生社会の実現に関心を持つ人や、このワークショップに参加できなかった実践者や研究者に、ワークショップ

の成果を共有することが目的です。日本各地で同様の課題を抱え、日々悩みながらも問題に取り組んでいる大勢の教育関係者や支援者が、本書で紹介する事例や参加者から出されたアイデアからヒントを得て、新たな解決の道を検討するための材料として役立てていただくことを期待しています。

ワークショップでは、招聘参加者が実践する先進的な取り組み事例を学ぶとともに、グループワークを通じて、ネットワーク構築や協働の可能性を明確化し地域を「巻き込む」ための方策を検討しました。本書のⅠの当事者の座談会では、立場や境遇を共有する者同士としてお互いに出し合った率直な考えや悩みが示されています。これは、普段は簡単には知ることではできない当事者の深い思いを想像する助けになることでしょう。Ⅱでは、招聘参加者(研究者やNPOの実践者)が各地で取り組むトランスナショナルな子どもたちへの支援活動やエンパワーメント活動の事例と課題が共有されます。「事前調査報告」では、本ワークショップの企画者でありファシリテーターである大学院生が、招聘発表者が関わっている地域を訪問して学んだことが記されています。Ⅲでは、ワークショップの中核プログラムであったグループワークの記録を紹介します。グループワークでは、A)「少人数在籍校で子どもをサポートするには」、B)「行政(教育委員会)と協働するには」、C)「子どもの自己発見をサポートするには」、D)「保護者と連携するには」、E)「子どもたちが地域へ発信するには」といった五つの課題について話し合われました。ここで出された意見やアイデアは、すでに読者が他の地域で実践している取り組みであるかもしれないし、逆にこれからの実践のヒントとなることが検討されているかもしれません。ワークショップで出されたアイデアは、その場では重要度が低かったものも書き残しておき、アイデアの粒を後日活用できるようにしています。(参加者からの声)からは、ワークショップという手法の意義も見えてくるのではないのでしょうか。

人の移動は、グローバル化によりこれまで以上に加速する可能性があります。トランスナショナルな子どもたちは、決して意識ある実践者によって支援され保護されるだけの「弱い」存在ではないことは、本書からも理解できることでしょう。異なった文化や言葉、多様な考え方を体験していることは、グローバル化が否応なしに進む現代社会では、トランスナショナルな子どもたち自

身にとって、むしろ大きな「強み」になり得ます。そして、彼ら彼女らは、地域社会にとっても、多文化を理解する貴重なリソースであり、新しい共生社会時代を積極的にデザインするプロセスに関与できる人材となることでしょう。彼・彼女らと積極的に協働し、共生社会を実現させていくことは、今の日本が持つ閉塞感を打破し、多様で明るく豊かな社会を築き上げるための原動力になるに違いありません。

このワークショップの実施と本書の作成にあたっては、多くの方々の協力をいただきました。特に、ワークショップのリソースパーソンを務めてくださった、愛知淑徳大学文学部准教授の小島祥美さん、NPO法人「みんなのおうち」外国籍家族共生支援担当理事の小林普子さん、琉球大学法文学部准教授の野入直美さん、立命館大学先端総合学術研究科博士課程の能勢桂介さん、神奈川大学人間科学部非常勤講師の藤田美佳さんからは、貴重な体験談を共有していただくとともに、講義の内容の本書への掲載を快く許可して下さったことに、この場をお借りして御礼申し上げます。このワークショップは大学院生の学びを更に実践的に広げる新しい試みでもありました。ワークショップを企画・運営した本学の大学院生は、企画段階で各地を訪問させていただき、リソースパーソンを務めていただいた方々が関わる実践活動の現場を見学させていただきました。こうした事前の活動は、大学院生が充実した企画を生み出すことに結びつけることにつながりました。各地の関係者の皆様、ご支援いただいた皆様、ワークショップに参加して下さった皆様に、あらためて御礼申し上げます。